令和7年3月1日発行／毎月1回1日発行／通巻1040号

総合演劇雑誌

テアトロ

3
2025

● 2024年・現代日本劇評家14氏による

舞台ベストワン・ワーストワン

水落 潔／谷岡健彦／河野 孝／丸田真悟／高橋宏幸／今村 修
神澤和明／山田勝仁／石倉和真／結城雅秀／みなもとごろう
太田耕人／九鬼葉子／林あまり

【批評的エッセイ】鈴木忠志と篠本賢一　渡辺 保

◉連載 いまを生きる㊺ 坂手洋二／共創する空間へ㊹ 西堂行人
旅する演出家㊾ 流山児 祥 【リポート】モルドバ紀行 七字英輔

今月選んだベストスリー 367 河野 孝

第38回テアトロ新人戯曲賞募集!

◆戯曲◆

青白い鳥②

三條三輪

人ハ落目（オチメ）ノココロザシ

藤田 傳

No. 1040

2024 舞台 ベストワン ワーストワン

清流劇場のギリシア劇

神澤和明

自身の演劇観に最も刺激を与える舞台がベストである。2024年前半期のベストには、奈良の旧邸から時間の澱を劇として汲み上げる観客移動型上演と、被爆した女子学生たちの記録を観客の記憶に変えた朗読劇を選んだ。後半期は、神の摂理の中でもがく人間の悲劇を、個である母親の日常に落とし込んだギリシア劇上演を取りあげる。**清流劇場**による『**ヘカベ、海を渡る**』だ。

劇団を主宰する田中孝弥の、ドイツ演劇における演出感覚の鋭さには、いつも刺激をもらっている。しかし、近年上演を続けているギリシア悲劇に関しては、あまり感銘を受けずにいた。わたしがもつギリシア悲劇の概念（宗教的思想と劇的構造）と関わってきた舞台経験が、邪魔をしていたのだろう。主要人物が神といかに対峙するのか、観客の代弁者であり登場人物であるコロスをどう活動させるのかに、鎖された思考傾向をもっていたのだろう。それが少し開かれたのか、一昨年の『くたばれ、ヒッポリュトス』あたりから、この劇団のギリシア劇が面白くなってきた。

今回の舞台はエウリピデス作の『ヘカベ』を原作としているが、かなり書き換えている。劇の大きな出来事は二つ。戦役に敗れたトロイ女王ヘカベが、死せるギリシアの英雄アキレスへの生け贄花嫁として、娘のポリュクセネを奪われること。危険を避けるため隣国トラキアに預けた息子ポリュドロスが、黄金に目をつけた王のポリュメストルに殺害されたと知り、彼とその息子を殺すこと。これらはそのままだ。だが、原作ではポリュドロスの亡霊が短く語るだけのトラキアでの出来事を実際に演じて見せる。ポリュクセネを生け贄の場に連れて行く役割を、英雄オデュッセウスから、戦乱で貴族身分を失った「飯炊き女」に代えている。そして最後に、復讐を黙認したギリシア軍総大将アガメムノンをヘカベが刺すという場面をつけ加えている。これはいずれも、客観の目による英雄叙事詩を、主観の目からする日常的叙情劇に読み替える手法のようだ。

幼いポリュドロスとトラキア王の息子たちの戯画的な場面は、ヘカベの哀れな末息子を実体化させ、彼の殺害が金銭欲という俗な理由にすぎないことを強調する。オデュッセウスを飯炊き女に替えたことを、ドラマトルク（丹下和彦）は英雄社会から脱落した日常性の極みと述べている。だが原作において、オデュッセウスは名誉の大切さとギリシア人の国家的意図としての論理が女王ヘカベを説得し、ポリュクセネ自身も王女としての生き方からその運命を受け入れる。だから、この変更はわたしには疑問だ。劇中でアガメムノンは「正義の論理」における公平な裁き手として、ヘカベの復讐を認める。原作は、正義を語る彼の言葉で終わる。まるで摂理を示す神のような立場だ。改変では、英雄社会を出た普通の人間（母親そのものか）が、幼児殺しという日常世界での事件に関わることで英雄社会から離れたアガメムノンを、同じ次元にいる者として刺すことができるとする。しかし、ヘカベの肉親を誰も手にかけていないアガメムノンは、ギリシアの総大将としての立場でしかない。観客からは、亡国の女王が自分たちを滅ぼした国の権力者を刺して復讐すると見える。むしろ英雄社会での事件になるのではないのか。ヘカベは二つの社会の間の「海」を渡り越す存在なのか。だが、越えたならば各局、彼女は主観的な日常を脱してしまう。犬となって海原に沈むのは当然だろう。

観客が悲劇を本当に実感できるのは、それが主観においてとらえられるからではないか。相変わらず世界で戦乱が続いている。それを俯瞰的なグローバル視点で眺めている限り、変化は生まれないのではないか。『トロイの女』のコロス一人一人のように、個人の主観の目で戦争を見て怒りを高ぶらせるならどうだろう。現代の悲劇は、傍観者のもつカタルシスではなく、主観、個人の悲しみ苦しみに対して慰め或いは強い意志を示すべきでは。

ギリシア悲劇の主人公たちは悲惨な宿命を負っているが、その物語は「不条理劇」にならない。不条理の実体は多条理、異条理だ。主人公が基づいている条理が、異なる条理をもつ世界と直面して葛藤を産むのが不条理劇だ。ギリシア悲劇では、登場人物たちは神の条理を「あるべきこと」として受け入れる。葛藤しない。だが、個人の主観こそが基本で、神の条理に優先すると考えてこそ不条理劇が成り立つ。作り手の意図とはずれるかもしれぬが、清流劇場のギリシア劇は、神話伝説を日常の個人的視点に読み替えることで、あらたな「不条理劇」を現出しているのかもしれない。大阪弁の台詞や、誇張したマスクの使用、生演奏によるコーラスなどに、技術の高い演技者たちも演出意図に応えている。次の作品はどう展開されるだろうか。